

遠山清子先生を送る

江 口 再 起

遠山清子先生は、1982年4月から本年2006年3月まで、24年間にわたって本学で教育にあたられた。私は現代文化学部地域文化学科の同僚として、またキリスト教センターの宗教委員会のメンバーとして身近で一緒に仕事をさせていただいた関係で、この送る言葉を書かせていただくこととなったのである。

先生のご専門は、アメリカ文学、日米比較文学であり、とりわけフォークナーに打ちこまれた。「フォークナーは、他ならぬこのわたしのために書いたかに思えた」と述懐なさるほどその研究に心血を注がれた。まことに文学研究者として幸せなことである。また他方で、アメリカのウィスコンシン大学大学院以来の研究テーマである日本文学の英訳をめぐる諸問題についても、文体論・翻訳論と研究をすすめられた。それらの成果は三冊のご本となっている。芥川龍之介や遠藤周作の英訳の問題、はたまた『歎異抄』や『万葉集』の英訳について論じたご著書『ことばといのち——異郷で読む日本の文学』（1994年）、フォークナーを論じた『ことばといのち2——フォークナーと現代の寓話』（1995年）、更には英語でのご著書“Faulkner and the Modern Fables”の三冊である。

アメリカ文学について門外漢である私には、先生のご著書を専門的に論じる資格はないが、フォークナーにせよ芥川にせよ、また『歎異抄』にせよ、研究対象を考えてみると、人が真正面から本気になってぶつかっていかねばならぬものばかりであり、そのことだけを考えてみても、先生のお仕事がいかに真剣なものであり、本格的なものであったかについて確信できるのである。

研究者としてばかりでなく、また先生は本学で教育者としても全力で事にあたられた。先生は確かに表面だけをスマートにこなすといった器用なタイプの教育者ではなかったと思うが、しかし本気になって学生ひとりひとりの事を考えて教育をされた。実は、私はこの数年、遠山ゼミの四年生の卒業論文の副査をさせていただき、その副査の仕事を通してかなりつぶさに先生の学生への指導を拝見させていただいたのであるが、それはもう本当にていねいなお仕事ぶりであった。先生はまず学生の長所を一所懸命みだし、多くの場合、学生自身気付いていないその自らの長所を指摘し、心をこめて励まされる。しかし、また他方で研究者としての厳しく鋭い視点で学生の論文の問題点をも、学生が自ら気付くような形で指摘注意しておられた。専門でない私からみれば、そんなに細かなことまでも、と思えるようなことをも、ていねいに指摘される

のである。

しかし、卒業論文の副査をさせていただき何よりも私が感動したのは、学生が論文の研究対象としているもの、つまり多くの場合それはアメリカの文学作品であったが、その文学作品自体に、先生もまた深く感動し心を動かされつつ、つまりその文学作品の読解に先生自らが参加されつつ、学生の指導に当たっておられたという事実である。一つの文学作品をめぐる、教師自らがその作品に心を揺さぶられつつ、学生と一緒に研究をすすめる。それが先生の教育者としての姿なのである。

別の言い方をすれば、それが先生の学問のスタイルだったと思う。一言でいえば、先生の学問は実存的なのである。学ぶことと生きることが深く結びついているのである。「学」と「生」が結びついているのである。それは、まさに先生のご著書の題名(『ことばといのち』)どおりである。まさに先生にとって「ことば」と「いのち」こそがすべてであった。「ことば」は先生にとって、それこそ痛みを伴うほど鋭く身体に食い込むもの、すなわち「いのち」に食い込むものなのである。退職に際して、先生が「東京女子大学学会ニュース」145号に書かれた文章から引用しよう。「記紀歌謡を英訳するために一字一字を見つめた時、刺すような痛みがあった。この言葉を捨て日本人であることを止めてアメリカに住むのだろうかと自分に問うたとき身体を貫いた鋭い痛みである」。

「生きる」と「学ぶ」とが深く切り結ぶこと。生きることに言え、私はもちろん先生の人生を論ずる立場にないが、しかし先生の生の一つの柱としてキリスト教信仰があるということは言うてよいと思う。先生は教師生活に入る前、ある外資系石油会社におられたが、自分の場所はこちらではないという思いが常にあり、生きることの苦痛を感じておられたという。そういう中、キリスト教と出会い、先生自身の言葉で言えば「疑問を残したまま、目を瞑って洗礼をうけた」そうである。1967年のクリスマス・イヴのことであった。しかし、そうであるからこそ、その信仰はますます真剣なものになり、常に自らの信仰を問い直すような、そういう信仰となるのである。そして、そうであるからこそ、その信仰には神の真実の平安が訪ずれるものだと思ふのである。退職を前にして、2005年12月14日に先生はチャペルの礼拝で話をされたが、そのとき選ばれた聖書のテキストはマタイ福音書10章29節～31節である。少し長いが引用したい。そこに先生の生の根元にある神からの平安な気持ちが表れていると思うからである。「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父の許しがなければ地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたはたくさんの雀よりもはるかにまさっている」。

先生は本学にあって様々な苦勞があり、それゆえご自身のことを「心ならずも戦うものになっていった」と言われる。しかし、私のみるところ、先生の最も深い根元にある人生への態度は、驚くほどの素直さと楽天性ではないか、それは神からの贈り物だと私は思う。